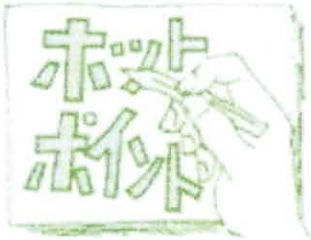

旧石器時代から現代を見れば

先日、小平市にある鈴木遺跡資料館に足を運んでみた。資料館は昔あった農林中金小金井研修所を利用した建物と勝手に思っていたのであるが、旧研修所の南半分は住宅が立ち並び、北半分は大きな金属板で覆われて中に入ることはできず、中の様子を見ることもかなわない。ここは遺跡の一角につき建物の立替が困難であることもあって、品川研修センターの建設にともない２０１４年に小平市に寄付したもので、目下、遺跡公園として整備すべく計画検討を始めたところらしい。資料館は旧研修所の西側、新小金井街道の向こう側にあった▼資料館に足を運んでみて初めて知ったのであるが、遺跡は縄文時代と思いきや、旧石器時代で驚いた。東京では縄文遺跡は多摩ニュータウンや大森貝塚はじめとしていくつかあるが、旧石器時代については野川遺跡が知られる程度。この鈴木遺跡は、約３万８千年前から約１万６千年前まで、何と約２万２千年もの間続いていたとされ、かつたくさんの貴重な遺物が見つかっており、２０２１年には国史跡に指定されている▼ところで山極壽一著『共感革命』によれば、人類の脳のサイズは７００万年前から５００万年間は現在のゴリラやチンパンジーと同じぐらいであったものが、集団で暮らすようになり脳は大きくなってきた。ところが農耕牧畜が始まった１万２千年前ごろと現代とを比較すると、現代人の脳は10～30％縮んでいるという。関係して「人類が言葉の獲得に至った理由の一つは、脳の中の記憶を外に出すためだったのではないか」と述べている。これでいくと「人間は徐々に自律的な存在から他律的な存在」に変化してきており、ＡＩへの依存で人類の脳はさらに縮小していくことになる。現代を原始・古代の視点で見なおしてみることも欠かせないようだ。

（土着菌）